I-26

流転について
建築論における時間的概念の把握とその可能性に関する研究
All things are in a state of flux
Studies on the understanding time concept in architecture theory and the possibility

○須貝　仁[1]，　田所　辰之助[2]
Jin Sugai[1], Shinnosuke Tadokoro[2]

In Architectural stock era, Understanding time concept that RUTEN(:all things are in a state of flux) is necessary to design dynamic architectural development.

1. 研究背景

「ストックの時代における建築の存続性とは」

近年はスクラップアンドビルドの時代を経てストックの時代と呼ばれる中，建築ストックの活用や建築再生の在り方が叫ばれている．昨年、日本大学建築学科の校舎であった五号館の解体を機に行われた建築の葬式も然り，学生の卒業設計展などでも，建築のスタティック性に対する批判と共に，動的な建築展開を行おうとする潮流が生まれている．しかし，何かが残り続けること自体が美徳という考えは如何なものだろうか．現実では残すにせよ維持管理，改修するにせよ既存不適格の建築物など，煩に堪えないことばかりである．建築がなぜ壊されるのか，なぜ残されるのか，なぜ再生されるのか，そしてなぜ終わるのか．さまざまな物事が過剰に生み出され，同時に消えていく現代においてその根底を考えることに重要性を感じる．

そんな現代における表面上の建築の存続性が，過去の模倣，そして演出に見えてしまう．

Figure1. 建築の葬式

Figure2. Ginza Sony Park

2. 研究目的

建築をただ壊す，残す，つくるという行為で区切るのではなく，また，一時的な利にとらわれることなく，大きな流れの中で建築を見定めていきたい．そんな時間の流れの中で，建築や風景，文化，人のコミュニティなどの移り変わっていく様相を見出し，建築を通して未来やその表情のようなものを展開していく．

3. 研究方法

日本における動的な考えの起源として関東大震災に着目し，現代に通じる有効性を意識しながら，都市的な視点で分析していく．また，自然や時間の流れとの均衡をもつ建築を有機的建築と唱えたフランク・ロイド・ライトの建築思想を読み取ると同時に，生物学・物理学・流体力学など建築に限らず時間の流れによる自然のデザインの模索を行い，思想を裏付ける論理的な展開をしていく。

4. 本論

4-1. 時間と都市-関東大震災

時間と都市の関係性を最も特徴的に表している出来事は関東大震災である．関東大震災では，東京がすべて無に帰り，それまでの時代の終わりを迎えた．そして，新たな始まりを迎えた時から，その動的な考えの兆しが生まれたのではないだろうか．それは，日本の未来をこれからどう創り上げていくのかといった時間軸の成立と同時に，動的な価値観が意識された瞬間なのではないだろうか．

帝都復興計画を行った後藤新平は，都市の骨格である道路や公園を形成するなどのインフラ整備をおこなった．それは時間の流れの中で都市がどう成長していくのか，都市の脈として人や物，社会などの循環性を示す１つの手法だったのではないだろうか．

4-2. 時間と建築-有機的建築

時間と建築との関係性を思想として最も体現しているのは近代建築の三大巨匠であるフランク・ロイド・ライトではないだろうか．ライトの建築思想は自然(時間や世界の流れ)と人間との関わり合いそのものであり，「有機的建築」という語を用いてそれを表現している．

物事の動的な展開をライトは「生長」と表現しており，またその概念を「枝振り」という日本語表現を用い

1:日大理工・学部・建築　2:日大理工・教員・建築

たアプローチをおこなっている. 枝振りとは枝の出具合のことであるが, その「振り」とは人間の身体的表現としての「身振り」に通底し, 単なる外見としてではなく内面性の発露としての枝の姿形である. 生長とは枝振りのように内的なものの現れそのこととしての動きであり, 常に物自体から独自性を生み出すものである. また, その独自性とは内的なものからの現れであり, 故に多様性をもちうる存在である.

また, ライトは「万物は流転する」と唱えた古代ギリシアの自然哲学者ヘラクレイトスから以下のような引用をしている.

All is a state of becoming（万物は生長の状態にある）これはどんな物事も常に動的な概念を内包していることを意味する. また流転の概念と有機性にはつながりがあり. ライトの建築思想には流転という概念が根幹に存在していたのではないかと考えられる.

Figure3.横山大観「生々流転」

4-3. 時間と自然-形態の類似性

時間と自然との関係性を意識して物事を見定めていた人物として, レオナルド・ダ・ヴィンチが挙げられる. ダ・ヴィンチは河川を地球の血と称し, 河川の水路を人体の血管といかに似ているのかについて言及しているが, それは隠喩や視覚的なロマンなどではなく, 地球は実際に一種の生きている身体であるが故に身体性と反映されているのであると述べる. このように自然には隠れた本質のようなものが存在し, 全く異なる状況に共通して見られる形やパターンの類似性をダ・ヴィンチは言及していた. 故にその形態理論には時間的な関係性が深く結びついていると唱えており, 動的な思想を意識した形態理論であると考えられる.

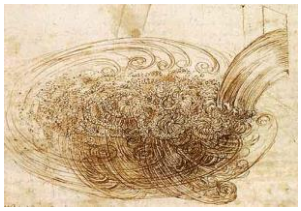

Figure4.　女性の編まれた髪

Figure5.　水の編み込まれるパターン

Figure6.　水流の渦巻

5. 結論

5-1. 時間の流れの中で建築を考える-「流転」

建築を考える時, そこには大きな世界の流れや時間の流れ, つまり流転の概念が取り入れられるべきなのではないだろうか.

流転の概念をよく表しているのが仲卸業者である. 消費者が求めるものは, 美味しい魚や安い魚, 季節のものであるが, 仲卸業者の人はその需要のみで仕事をおこなっていない. 例えば魚があまり取れない時は高く仕入れ, 大きなマグロが取れた時は値打ち以上の金額でセリ落としたりなど, それはただの忖度ではなく, 漁師, 消費者, 市場全体を考えた結果なのである. 目先の需要と供給にとらわれず, 市場として全体の流れをより良い方向へもっていく考えに基づいているのである. また, それは市場のためであり結果的に自分のためにもなる. ここに自分(一)と市場(全)の関係性が現れる. この関係性が要である.

考えてみると建築家と仲卸業者は似ている. 現代では効率化が図られ, 仲卸業者のような中間領域は省かれてしまう. しかし, その役割は市場全体に影響する. だからこそ, 建築家も大きな流れの中で流れを調整していく役割なのではないだろうか. 大きな流れの中に存在している自分と全体との関係性. 流転とは一と全のスケールを繋ぐことである.

参考文献

[1]後藤新平:『都市デザイン』, 藤原書店, 2010 年
[2]御厨貴:『時代の先駆者　後藤新平』, 藤原書店, 2004 年
[3]筒井清忠:『帝都復興の時代』, 中央公論新社, 2011 年
[4]アンリ・ベルクソン, 増田靖彦訳:『笑い』, 光文社, 2016 年
[5]後藤暢子, 伊東豊雄, 他 2 名:『中野本町の家』, 住まいの図書館出版局, 1998 年
[6]福岡伸一:『動的平衡』, 木楽舎, 2009 年
[7]内藤廣:『建築はじまりに向かって』, 王国社, 1999 年
[8]モーセン・ムスタファヴィ:『時間のなかの建築』, 鹿島出版社、2005 年
[9]日本建築学会:『生命に学ぶ建築』, 建築資料研究者, 2018 年
[10]所功:『伊勢神宮』, 講談社, 1993 年
[11]フィリップ・ホール:『流れ』, 早川書房, 2016 年
[12]水上優:『フランク・ロイド・ライトの建築思想』, 中央公論美術出版, 2013 年
[13]フランク・ロイド・ライト:『A TESTAMENT BY FRANK LLOYD WRIGHT』, 彰国社, 1966 年
[14]杉浦明平:『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』, 岩波書店, 2018 年